

シーローン王国

王国を発つ日
パックス殿下に呼び出された
私はその先で衛兵達に囲まれ
拘束されたのです

「ビヤビヤビヤビヤ!!
さぞ、さぞ!!」

「きゃいっ..」

「まさか本当に夢で
言われた通りに
なるとはな!」

「つく...」

「抵抗しても無駄だぞ、
ここはお前のために
作った特別な部屋だ!」

「いつか何かするかも
思っていましたか!」

まさかこんなことを
するなんて

「王級の結界を始め
様々な道具を
揃えたのだぞ!!」

「ひひひ」

「性奴隷」にできる!!

「これでようやくお前を...」

「ぎゃああああっ!!」

「ぐひひひひっ!!」

「殿下やめてください!!
こんなことをしてる
場合じゃ…」

「ひうっ!!」

「フィットア領の
転移事件を
調べるのだろう?」

「どうしてそれをっ!!」

「ぶっはっはっは
行かせるわけなからう」

「ん」

「行かせたらお前は
二度と戻って
来なくなるそうだからな」

「ん」

「だからこうしてお前を
性奴隷にすることに
決めたのだ」

あ…あれは男の人の!!

「ぶははっ!!」

「光栄に思え
このバック・スシローンの
寵愛を受けるのだ」

「ん」

「いいぞいいぞ、
嫌がるお前を無理やり
孕ませる」

やめっ!やめてください!
殿下それだけは…!!

「これこそが余の望んだ
展開だ!!」

5人は世継ぎを
孕ませてやるからなあ!!

「これが、ロキシの純潔…」

「いたっ!!」

「これ以上はう…やぶれう…」

ふんッッッ!!

私の…初めてが…

純潔を奪われた
痛みと…絶望で
私の目からは
涙があふれてきました

「おおおおっ!!」

「やった…」

「やったぞ!!」

ついにロキシの純潔を
奪ってやったぞおお!!

「かあっ!!」

「いたっ!! いたっ!!
やめてくださいっ!!」

「これが女の…
ロキシの中か!!」

「ぐひひひっ!!」

泣き叫ぶ私のことなど
意にも介さず、獣のように
私のアソコに叩きつけて
きたのです



手枷を外され、両腕が自由になっても私は襲い掛かってくる殿下に恐怖し

思考も体も委縮してこの激しい行為を受け続けるしかありませんでした

「あぐっ痛いだけ…です…っ抜いて…抜いてくださいっ!!」

「フッ! フッ!!」
「どうだロキシィ」
「余のチンポの味は!」



「ならすぐに余の大きさになじませてやろう!!」



「その割には余のモノをこんなにも締め付けているではないか」

「ロキシィには余のサイズは少しでかすぎたか?」

アソコが裂けてしまひそうです…っ

痛い…苦しい…

「ひゃははははっ!!」

「そろそろ出そうだ!!」

「ダメです!!それだけはッ!!」

「中...膣内だけはッ!!」

「ひやはははは!!
言っただろう、
5人は孕ませるとな!!」

「さあ王族の子種を
受け取れッ!!」





「あ……あああ……
嘘……こんなことって……」

「出してやったぞ……
ロキシーの膣内に！」

「ひやは、おひやひやひや!!」

子宮に打ち出された
子種はとてつもなく濃く

膣が満たされていくの
をはっきりと感じる
ほどでした

なんとか……
隙を見て逃げ出さないと……

「殿下、もう始められて
たんですね」

「え……?」

その時、部屋の階段から男たちが
ぞろぞろと入って来たのです



「お前を監禁するために
雇った者たちだが」

「口止め料として
この宴に参加して
もらおうと思ってるな」

「殿下、本当にやうちまって
いいんですか?」

「前は使うなよ
孕ませるのは
あくまでこの余だ」

「あとは好きに
使って構わん」

「あ……ああああ……」

逃げられない……
魔術が使えない私じゃ
この人数から逃げることは
できない……

「いや……来ないで……」

「来ないでください……」

「いやあああああッ!!」